ORIENTEERING JAPAN

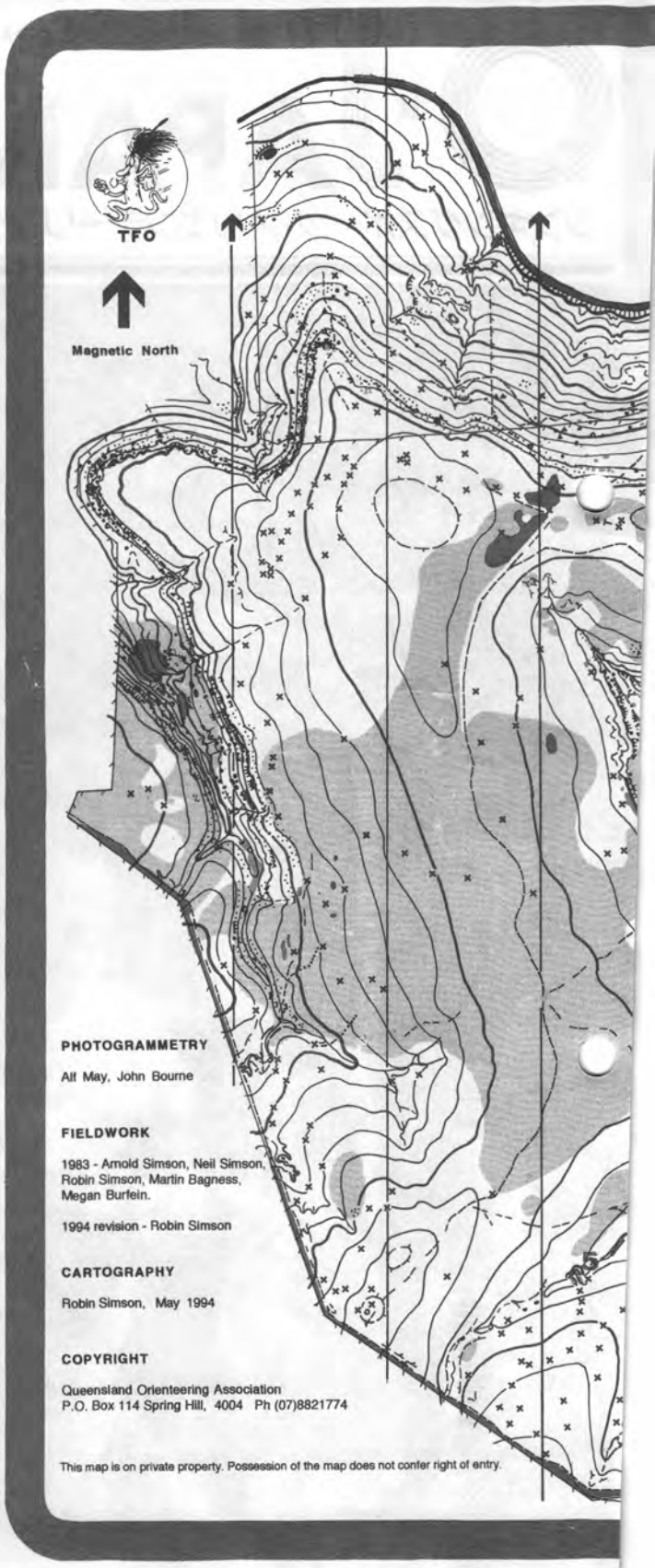
O-JAPAN

シンキングスポーツ・オリエンテーリング

94/10

1994年［平成6年］10月10日発行
（毎月1回10日発行）
第11巻第10号通巻第135号
昭和63年6月24日第三種郵便物認可

1994 Queensland Champs-Day 2							
W-18A, W40-A, M40-AS, M55-A, M-20AS							Lane 6
Red 6 4.5 km 190 m climb							
▷			✳				
1	302		◡		6×3		
2	313		▲		0.5/2.0	♀	
3	329		▲		0.5/1.5	•○	
4	332		✳		1.0	•○	⊽
5	324		✳		0.5	○•	⊽
6	343	←	✳		5×5	○	
7	353		∩				
8	308	↑	⊓		2.0	⌊•	
9	317	←	▲		1.0/2.0	○•	
10	319	↘	▲		1.0/1.5	○•	
11	328		▨				
12	200		⁄			⊣	
○>——— 80 ———→◎							



［本誌掲載のため約８８％に縮小］

ORIENTEERING JAPAN
O-JAPAN

＝写真はいずれも６月に奈良県橿原市で行われた，同市中学校体育大会オリエンテーリングの部の模様＝
（提供：城山　勉　氏）

◇◇◇

■今月の表紙：根の上高原６人リレーＯクラブカップ(94.9.25) で２連覇を果たした多摩ＯＬのウィニングラン。中央が最近絶好調の富田吉郎選手。　（撮影：桐田　幸宏氏）

■今月の地図：９月24・25の両日，オーストラリア・クィンズランド州で行われた，同州選手権大会２日目の使用地図（コースはM55-Aほか）。この大会の後，27・28の両日には同じくクィンズランド州において，世界マスターズゲームのオリエンテーリングの部が行なわれ，日本チームは好成績をおさめ，多数のメダルを持ち帰った（ショート・リポートは本誌20ページ，地図提供：遠藤　益夫氏）

◇◇◇

９４／１０月号・No.１３５　目　次

＝１９９４年ユニバーシアード＝
・世界学生オリエンテーリング選手権大会
報告：桐田　幸宏 … 4-10

＝オリエンティアのための Medical Advice ＝
・⑤ Veterans World Cup あれこれ [その1]
ＯＬＣレオ：愛場　庸雅 … 11

＝EVENT　REPORT＝
・根の上高原オリエンテーリング大会
報告：桐田　幸宏 … 12-13

＝連載＝
・大会運営学「大会を開き，育てる法」
第４回　『超』調査論
早大ＯＣ寿会　池ヶ谷　悦朗 … 14-17

＝全国ＰＣ愛好会のページ＝
・パーマネントコース　りぼ～と
木佐木　輝雄 … 18

＝リポート＝
・香港ジュニア合宿報告　村越　真 … 20
・日本チーム好成績で帰国（マスターズゲーム）
編集部 … 20

＝お知らせのページ＝
・ＰＣ情報　・編集部より … 20

◇◇◇

STREAMER

久しぶりにこのコラムにスペースができた。昨年あたりからあまり愚痴っぽいことを書くのをひかえているつもりだし，さりとて建設的な（と自分では考えているが）意見を述べても，所詮「流人」の身，いずれも犬の遠吠えに聞こえそうだ。

先月の「ＩＯＦ総会」の記事に，訳者がアンダーラインを引いた部分があったが，それを基にして，現在の日本のオリエンテーリング界に物申してみたい。いや，やはり前向きな書き方をしよう。

(1)ＪＯＡ（すなわちオリエンテーリング界全体）の運営をきっちりとした機構をもってすすめていこう。中央・地方の偏りなく，より多くの人々に参画してもらい，すすめていかなければならない様々な事がらに対応して委員会やワーキング・グループを組織しよう。(2)いま，急ぎ組織したいグループは「スキーＯ」「トレイルＯ」「普及」。特に，「普及」はより多くの地方の地域クラブの育成とそれがベースとなった県協会の組織と援助，さらにそれぞれの市町村体協や都道府県体協への加盟促進。(3)前２者「スキーＯ」と「トレイルＯ」は，ＩＯＦのそれぞれの委員会が日本・韓国・香港を中心とするアジアへの導入・普及を計画中（次号にでも紹介するＩＯＦ HEADLINE NEWSより）である。受入れ準備を急ごう。

流人

1994年ユニバーシアード

(世界学生オリエンテーリング選手権大会)

1994年度のユニバーシアードはさる9月5日-11日、スイスのバリス州において開催された。

今回はショートが新たに種目に加わり、代表選手も1名増えて男女各6名となった（本誌では6月号・7月号で代表選手の紹介を行っている）。

選手たちは遠征前に複数回の強化合宿をこなし、万全の調整で大会に臨んだようである。それ以前に村越コーチや鹿島田選手など、日本では一線級のランナーが、このユニバーに強い目標をもって臨んでいること自体も選手団のレベルを高めていたのかもしれない。山川克則団長が報告書に書いているように「事前の準備は、その量も内容も過去に例を見ない充実したものになっている。」

結果は全体として好調だったようである。エース鹿島田選手のケガや、女子のリレーペナなど残念な現象も起きてはいるものの、総じてコーチ・選手団の自己評価は高い。

村越コーチの総評を下に掲載する。

選手団は、各選手と山川団長、村越コーチのほか、トレーナーとして、夏先からヨーロッパ遠征を続けていた安斎秀樹氏と、事務手伝いとして静岡大学の益子奈緒美さんで構成されていた。あと付け加えるならば、新婚旅行中？の小長井選手夫人の美由紀さん（旧姓・田中）も会場に応援に来た日があったようである。

今回は成績に加えて、各選手の感想を紹介する。

選手の皆さんお疲れさまでした。

今年のユニバー選手は、男子が学部卒業生中心、女子が現役4年生中心となった。上は4年生の集合写真。トレーニングキャンプの行われたシンプロンパスにて。（左から志村・松沢・千葉・植田・金田・稲村の各選手）

インフォーメーション前の歓迎の垂れ幕と金田選手

コーチ　村越　真

草原の向こうに青い空と、雪に被われた岩山が見える。その中を原色のトリムを着た選手がトップスピードで走り去ってゆく。今回のユニバー（世界学生選手権）ではそんなファンタスティックな光景がなんどとなく用意されていた。とりわけリレーのためのモデルイベントは素晴しかった。アルプス最大の氷河やアイガー・ユングフラウを望むオープンテラインである。2本のロープウェイをのりつぎ、海抜2900mからスタート。北アルプスの森林限界より上に出た幅の広い尾根を想像してもらえばいい、その尾根上に展開する微地形を舞台にしてモデルイベントとリレーは開催されたのであった。幸い天気にも恵まれた。前週にトレーニングでは半分以上雨が降っていたが、ユニバーの週はクラシカルの午後を除けば素晴しい天気であった。

日本選手の成績については記録をごらんいただきたい。ショートでは金並が予選通過まであと一人だったし、クラシカルでは上位に対する%は女子についてはは世界選手権やユニバーをとおしてほぼ過去最高だ。男子についてもエース級以外の選手がこの%で走れた意味は大きい。この半年間の努力の結実だと思うと嬉しい。

もちろん残念なことは反省すべき点も多い。エース鹿島田が直前の練習で怪我をしたことはその最たるものだろう。怪我はもちろん避けるべきものではあるが、われわれが怪我と隣り合せにいるレベルまで来ているということは自覚してもいいだろう（北欧の大会では松葉杖をついている選手を見ることが珍しくない）。また、クラシカルの走りをリレーに生かすことができなかった点、特に女子の失格（2走植田のコントロール不通過）、男子がウムスタートを免れることはできなかったことは、リレーに対する準備が充分でなかったことを物語っている。

クラシカルの日に感じた感動も日がたつにつれて薄れてきた。男子でトップから132%、女子で140%は確かにこれまでのユニバー遠征の中でも特筆すべき結果である。金田と金並はトップとほぼ25分差で走っている。しかしまだまだ上には厚い壁が立ちはだかっている。彼女らは非常にいいレースをした。それでも成績は50位に及ばないのである。これ以上の結果をだす方法の模索が大きな課題として私たちの目の前に現われ始めている。

今ではあのくらいの結果が出て当り前だと思ってしまう。それは決して結果にたいする評価がネガティブになった訳ではない。多分私たちの自己概念が向上したのである。今までは努力と準備に相当する結果を出すことができなくて、自分たちの真の力を低く見積りがちであった。今は違う。これが当然の結果と思えるようになったのである。様々な失敗（怪我、選手のコンディション不良、リレーでの失格や男子のウムスタート）の中で評価すべきものがあるとしたら、ポジティブな自己概念を得たこと。その一つにつきると思う。

なお詳細な報告書は遠征チーム発行の報告書をお読みいただきたい。

ショート成績

男子

セミファイナル（上位16人が予選を通過）

A	1	ForsmanPetri（FIN）	21：45
	16		27：37
	35	鈴木　卓弥	47：23
B	1	RopekRudolf（CZE）	25：05
	16		30：28
	25	山内　亮太	36：02
	26	小長井信宏	37：10
C	1	KittilsenPal（NOR）	24：33
	16		29：10
	26	松沢　俊行	34：06
	29	山本　英勝	37：26

Aファイナル（46名）

1	CoupatOlivier（FRA）	24：10
2	ForsmanPetri（FIN）	25：37
3	ZakourilVaclav（CZE）	26：03

Bファイナル（52名）

1	PospisilVit（CZE）	26：04
25	小長井信宏	34：08
32	山内　亮太	37：21
33	山本　英勝	37：27
43	鈴木　卓弥	45：17

女子

セミファイナル（上位16人が予選を通過）

A	1	BoehmLucia（AUT）	24：09
	16		34：55
	17	金並　由香	35：26
	24	志村　聡子	44：46
B	1	M-F Sabrina（SUI）	24：01
	16		31：14
	22	金田　収子	36：32
	24	稲村　仁美	38：32
C	1	WolfBirgitte（SUI）	27：40
	16		34：40
	23	千葉あかね	41：08
	25	植田　佳子	49：35

Aファイナル（47名）

1	BoehmLucia（AUT）	25：43
2	P-M. Anne-Marie（FRA）	26：11
3	KaljusKuelli（EST）	26：15

Bファイナル（30名）

1	MackenGeorgina（AUS）	30：40
15	金並　由香	38：40
18	植田　佳子	41：05
20	志村　聡子	43：09
22	稲村　仁美	47：05
28	金田　収子	57：07
29	千葉あかね	58：50

クラシカル成績

男子（97名）

1	ProkesTomas（CZE）	76：42
2	BuehrerTomas（SUI）	79：07
3	CoupatOlivier（FRA）	79：30
60	山本　英勝	100：36
69	小長井信宏	109：01
72	鈴木　卓弥	110：26
82	松沢　俊行	124：04
86	山内　亮太	132：04

女子（75名）

1	M-F. Sabrina（SUI）	61：09
2	BoehmLucie（AUT）	61：20
3	Romanens M-Luce（SUI）	61：31
51	金田　収子	85：43
55	金並　由香	87：16
67	稲村　仁美	102：23
68	植田　佳子	104：33
72	千葉あかね	123：27

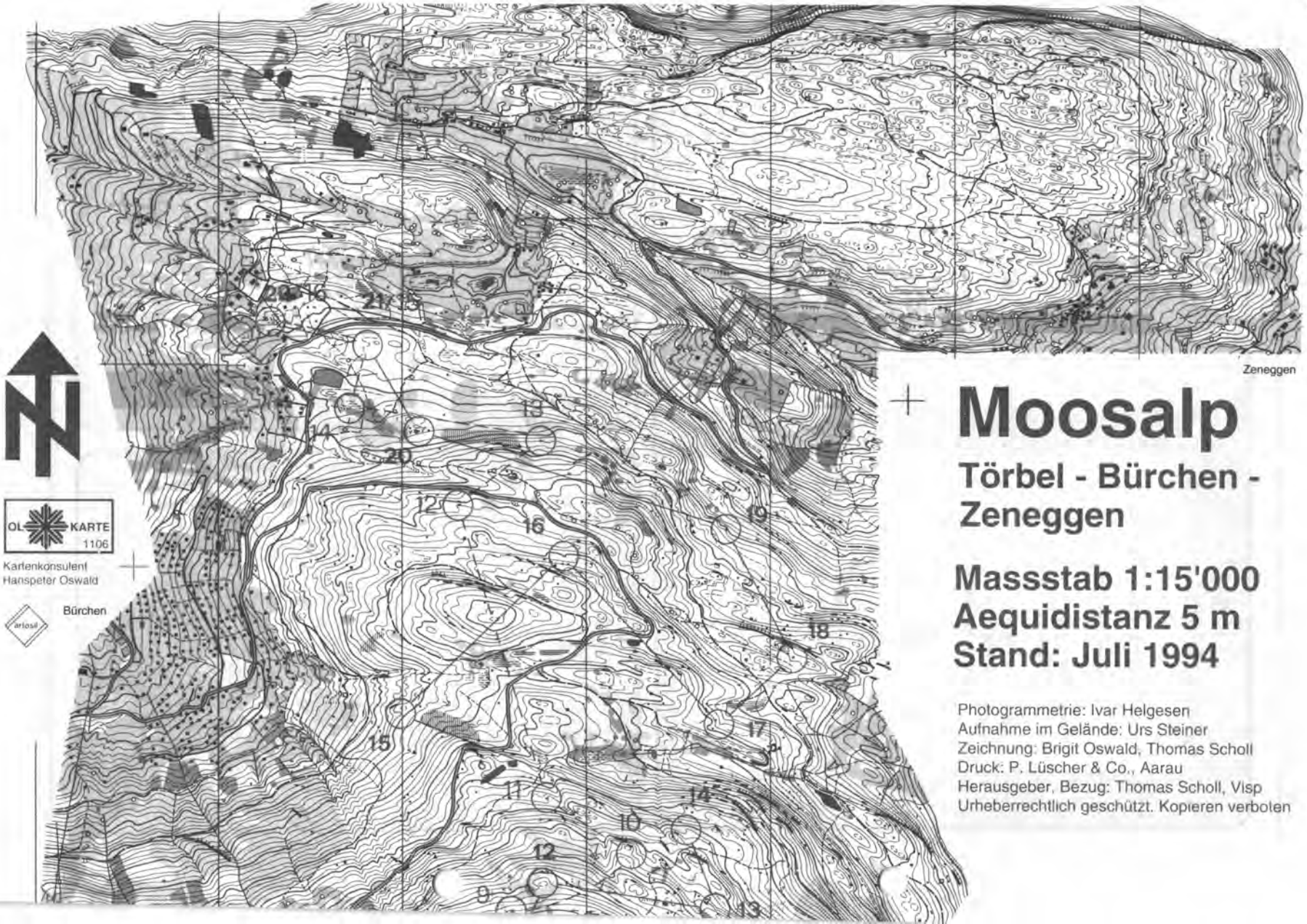
リレー成績

男子（22チーム/完走20）

1	Switzerland	3：23：34
2	Czech　Republic	3：34：44
3	Hugary	3：42：35
16	Italy	4：31：01
17	Japan	4：53：46
	小長井信宏	69：09
	鈴木　卓弥	78：16
	山本　英勝	74：11
	山内　亮太	72：10

女子（14チーム/完走12）

1	Switzerland	2：47：31
2	Czeck　Repblic	2：52：45
3	Austria	3：02：10
11	Italy	3：44：52
12	USA	7：39：13
dsq	Japan	----------
	金並　由香	59：48
	植田　佳子	(59：--)
	稲村　仁美	64：22
	金田　収子	81：26



Moosalp

Törbel - Bürchen - Zeneggen

Massstab 1:15'000
Aequidistanz 5 m
Stand: Juli 1994

Photogrammetrie: Ivar Helgesen
Aufnahme im Gelände: Urs Steiner
Zeichnung: Brigit Oswald, Thomas Scholl
Druck: P. Lüscher & Co., Aarau
Herausgeber, Bezug: Thomas Scholl, Visp
Urheberrechtlich geschützt. Kopieren verboten

WORLD UNIVERSITY ORIENTEERING CHAMPIONSHIPS 1994

Classic Distance
8 September 1994

—— **Men**

– – – **Women**

- Wald weiss, offenes Gebiet gelb
- lockerer Wald
- einzelne Bäume
- rauher Boden, Gesträuch
- Unterholz, Dickicht, Gebüsch
- Hügel
- Senken, Vertiefungen
- Böschung, Grube, Rinne
- Bäche, offene Wasserleitungen
- Seelein, Brunnen
- Sümpfe
- Felsband, Felswand
- Steine, Steingruppe
- Felsblock, Felsloch
- Geröll, Blockfeld
- Wege
- Hochspannungsleitung
- Skilift, Sessellift
- Mauer
- Zäune
- Ruine, Kreuz, besonderes Objekt

(2353)

鹿島田浩二

まず、なんといってもくやしい。今年は例年以上に豊富にトレーニングし、富士登山でも好タイムを出して万全の体調だった。スイスに来てからは4日間トレーニングしたが1分以上のミスは一つもなく、技術的にも十分対応していた。これだけ万全の準備と最高のコンディションで大会を迎えたら、どんな結果が出てきたのであろう？1ランク上の世界が見えたかもしれない、あるいはプレッシャーでつぶりまくったかもしれない。どんな結果でも構わない、結果が見えなかったこと自体が非常にもどかしいのだ。準備と結果の関係、これが見えてこそ競技としてのスポーツは楽しいし進歩がある。熱中してみていたテレビを最後のクライマックスでプチンと消された気分だった。

でも自分が走るはずだったことを思い出さなければ、観戦は楽しかった。収子が予想以上の好タイムでまるで鹿のように森から現れ、きょとんとこっちを見たとき、Hidiが日本的な力強さで他国のランナーを圧倒してゴールしたとき、リレーの中間を駆け抜ける皆を見たとき、自分のケガを忘れてただただ嬉しく、興奮を覚えた。今年のメンバーの1人でも多くの人と来年のドイツに行けたらと思う。

それと僕が引退するまでに1度はスイスに何かしらのチャンピオンシップをやってほしい。絶対に参加するから。

山本英勝

日本男子過去最高の成績!?大きなミスもせず、目標タイムで走れたけど、僕はあれを会心のレースと思っていませんでした。

クラシカルで60位、トップから132%。決して威張れるわけではないのですが、この%はユニバーシアードのクラシカルに於ける日本の過去最高だそうです。現在の若手オリエンティアでは僕と同レベル、もしくはそれ以上の人は大勢います。そう考えると、この僕が普通のレースをして、60位という出走者の中くらいの成績を出せるということは、大きな意味を持っているのではないでしょうか。

実際、走っているときに感じたのは、他の国のオリエンティアが自分より格段とレベルが違うというわけではないということです。実際、彼等は案外つぼったりして、僕が容易に出し抜くということもしばしばでした。彼等がミスするのも僕らと同じようなのです。

今回の遠征では、日本でのオリエンテーリングも海外のオリエンテーリングも変わらないこと、そして、無理をせず、基本に忠実なオリエンテーリングをすれば、海外でもよい結果が出るということを理解できたことが大きな成果でした。これからはこの経験を活かせるように頑張りたいと思います。

松沢俊行

スイスという国に抱いていたイメージも良かったし、同行する仲間も面白く（特に女子は「出逢うのが5年遅かった」と思わせる人ばかり）楽しい遠征になることは必定でした。

実際現地に入ってからも体調は充実し、技術面も上向きでした。ところが結果は……。

6月号で抱負を取り上げてもらいました。あの頃は何もわかっておらず自分を鼓舞する意味合いの強いことを書いたとはいえ、実現したものは何一つありませんでした。記録として残ったのはクラシカル82位のみ。惜しかったとさえ言えません。

結局「楽しい旅行、悔しい遠征」に終わったユニバーでした。ハイジの国から帰国した今、気が抜けて廃人のようになっています。でも新しい目標も持ち帰って来ました。

それは「過去OLに使われたことはなく、金輪際使われることもなかろう」とプロフィールに記されたEggishorn（9/9に開放された、リレーのモデルテライン）に新婚旅行でフラッグを携えて登り、OLをすること－－－

もしかしたらインカレで勝つより難しいかもしれません。が、この企画に乗ってくれる方を募集。（絶賛発売中？の日本学連発行の報告書には競技色の濃い文章を書いているのでそちらにも目をお通しください。）

Elnergalenを走る鹿島田選手

金田収子

クラシカルに関しては、私だけに限らず、多くの人にとってもの可能性を示すことができたかと思われ、とてもうれしく思っています。もちろんレベルの高い大会でしたから自分の欠点もあらわれやすく、これからやらねばならないことが多いことがわかりました。しかし、全くの夢ではないレベルの人たちも多く、その中で走る、あの刺激的な、わくわくするような楽しさは、スイスのあの素晴しい風景とともに一生忘れないと思います。

志村聡子

私はショートに参加しましたが、結果は（…と言うより内容が）全然ダメでした。

まず予選は気合いが入っていなかったのか、何となくふわふわとオリエンテーリングをしていたような気がします。決勝では、リレーのことだけを考えて走っていたので気合いは十分でしたが、レース自体に集中することができていなかった為、気合いがカラ回りしてしまい、何となく歯切れの悪いレースでした。

最終日に出場したナショナルイベントはリレーと同じテラインでしたが、ひたすら走るコースで、とても楽しかったです（スイスで走った中で一番楽しかった）。

スイスに行って分かったことは、「私は、オリエンテーリングが全く出来ない」ということでした。このままではみっともないので、オリエンテーリングが少しでもうまくなるように頑張っていきたいと思います。

植田佳子

スイスに行って本当によかった。

行け！と言って下さった方々、そしてメンバーのみなさん、コーチのみなさん本当にありがとうございました。

そして、もっとうまく速くなりたい。

稲村仁美

セレクション後スイスに行くまでオリエンテーリングがほとんどできなかったので不安がかなりあり、またあんなこまごまとした地図で走ることができるか心配のままトレキャンに入りました。

しかし日がたつにつれて少しずつ慣れてきてこれなら何とか走れるのではないかという気がしました。実際のレースでは細かいことを言えばキリがありませんが、全体的に気持ちよく走ることができた気がします。

スイスを観光することもでき短かった2週間を十分楽しんできました。

ここでの経験を秋からの大会やこれからの自分のオリエンテーリングに対して生かせるよう努力していこうと思います。

いろいろ支援して下さった方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。

千葉あかね

ユニバーまでの私の最重要課題は「地形を使ったオリエンテーリング」でした。私が地形を読めていないと徹底的に思い知らされたのは、昨年11月の西日本大会と、それに続いて行われた合宿でした。それからは、地図から地形のイメージをつくること、それを使ったオリエンテーリングが上手くなるように、各レースや練習をしてきました。その結果、遠征の直前には「前よりもずっと地形が読めるようになった」と自分で思えるようになりました。それにも関わらず本番で不本意な結果に終わったのは、信じられないほど地形を使うことが下手だった以前の自分と比べて、ちょっとましになったという程度だったということも、もちろんありますが、それよりもまだ未熟なら未熟なりに、自分が確実にいけるルート、スピードでレースをすることが出来なかったからだと思います。

今回の遠征では日本代表として良い成績を出すことは出来ませんでしたが、私個人としては多くの貴重なものを得ることが出来ました。今後はその成果を発揮して、私のユニバー遠征は結果的に成功したと言えるように頑張りたいと思います。

選手団の集合写真（ショート決勝レース終了後。ケガの鹿島田選手と、カメラを持つ安斎トレーナーを除く全員）。
前列左から、益子奈緒美（事務手伝）・千葉あかね・志村聡子・松沢俊行・山内亮太・鈴木卓弥・金田収子
後列左から、山本英勝・山川克則（団長）・植田佳子・村越真（役員）・稲村仁美・金並由香・小長井信宏・美由紀（小長井夫人）

番外：植田選手、町をあげての壮行会

植田佳子と稲村仁美。広島大学が輩出した2人のエリートである。一昨年度インカレ団体戦で初優勝をしたときのメンバー、昨年度は個人戦で仲良く5位と6位。今年も仲良く一緒にユニバー選手になって、クラシカルで似たようなタイムを出した。先日のショートインカレでは予選で同タイム。あきれるほどだ。

広島大学としても歴史的なヒット作である。ユニバー遠征に当たっては、OBからも大学からも、暖かい援助を受けている。

しかし植田選手にはもう一つ、地元、島根県那賀（なか）郡金城（かなぎ）町からも、暖かいご支援があったようだ。

1万人にも満たない人口の金城町。世界の舞台に立つスポーツ選手を輩出するとなると、ちょっとただではすまない。お盆に帰省を指示された植田選手は、町役場へ招待された。（普段滅たことのない）綺麗なかっこをしていったというこの壮行会では、「インカレのレースで走るより今緊張しています。」とあいさつをして受けたとのこと。町長さんにも、「がんばってきなさい」と激励された。さらに、町には何本かの横断幕も用意されたようだ（下の写真）。

実はこの騒ぎ、金城町に住む、木村弥生さんというオリエンティアが仕掛け人だったようだが、いずれにしても植田選手には大きな励みとなったことだろう。

中国新聞とやらに掲載された記事も併せて紹介しよう。

帰国の翌々日だったかに、院試を控えていた植田選手。おそらく理解し難い行動にうつったであろうご両親にも、むしろ親孝行ができたに違いない。

地元、金城町波佐（かなぎ はざ）の橋にかけられた横断幕と植田選手（見えるかな？）

世界学生オリエンテーリング

金城出身の植田さん（広島大）出場

全日本学生オリエンテーリング選手権大会女子団体の部で3位入賞し、部員二人とインタビューを受ける植田さん（右）＝今年3月、群馬県の渋川市民会館

金城町長田出身で、広島大学理学部四回生植田佳子さん（二）が、今年九月五―十日にスイスで開かれる世界学生オリエンテーリング選手権大会の

訓練積み9月スイスへ

日本代表選手に選ばれた。植田さんは「直後に大学院の試験が控えており、プレッシャーもあるが頑張りたい」と抱負を語っている。

オリエンテーリングは、地図とコンパスを持って競技エリア内に設定された数カ所のポイントを回り、その所用時間を競うスポーツ。急変する天候に対処する体力や判断力、初めて通るコースを地図を見て瞬間的に地形を把握し最短ルートを見つける能力などが求められる。

植田さんは入学当初、勧誘を受け「何となく」同大学のオリエンテーリング部に入部したが、金城中でバレーボール、浜田高では剣道で磨いた持ち前の運動能力もあってめきめき腕を上げ、今年三月に群馬県渋川市で開かれた第十六回日本学生選手権大会女子団体の部に他の部員二人と出場、植田さんはアンカー（第三走者）を務めベストラップを出す力走でチームを三十チーム中三位に押し上げたほか、同個人の部でも六十人中六位と上位入賞した。

植田さんの素質に注目した日本学生選抜チームの監督・村越真さん（三四）＝静岡大教育学部助教授＝は、四月に群馬県で行われた同チームのセレクションを受けるよう勧め、植田さんは全国の精鋭二十五人の中から六人という〝狭き門〟に合格した。スイスの会場は標高約二千㍍と高地のため、選抜チームは八月初旬に八ケ岳（山梨県と長野県の県境）で高地対策のトレーニングを積む。

現在、化学研究者の道を目指して試験勉強に励んでいる植田さんは「大学院の試験が大会直後（九月十三、十四日）で、合宿と勉強との両立は大変ですが、一つでも順位を上げるために頑張りたい」と話している。

なお今年の選手のスケジュールは下記の通りであった。
（報告書より抜粋する）

8/28 到着 チューリッヒホテル着
8/29 移動 夕方4時ごろ着。1時間くらいのジョグ
8/30 練習 エルナーガレンで地図読みとルートプラン
8/31 練習 シンプロンパス／午後、稲村・植田合流
9/ 1 休養
9/ 2 練習 シンプロンパスウエスト／鈴木卓弥合流
9/ 3 練習 シンプロンパスウエスト／鹿島田負傷・入院
9/ 4 休養 ユニバー宿舎に移動
9/ 5 モデルイベント・開会式
9/ 6 ショートディスタンス
9/ 7 休養
9/ 8 クラシカル
9/ 9 モデルイベント
9/10 リレー

以上で本誌におけるユニバーシアードの報告は終了する。あまり競技的な内容については、取り上げることができなかったが、取材するゆとりもなかったのでご勘弁願いたい。選手の気持ちや目標などについては事前からもっと深く追い続けることができれば面白い記事が書けるのになと思っている。力量不足と時間不足は永遠の課題である。

来年は世界選手権がある。エリート選手にわくわくするような気持ちを与えられるような、そんな記事をつくっていきたい。

エリート選手への応援を今後ともどもよろしくお願いいたします。

桐田幸宏

オリエンティアのための Medical Advice

OLCレオ　愛場　庸雅

⑤ Veterans World Cup あれこれ =その１=

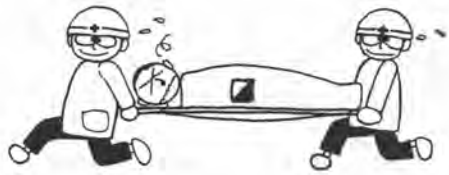
この夏は，スコットランドで開かれたVeterans World Cupに参加してきました。その時にあったことや気づいたことを，よもやま話風に書いてみたいと思います。

・ダニに噛まれた話

実は前回の原稿（つつが虫病とライム病）は，VWCに行く前に書き上げて投稿してから出発したのですが，その時はまさか自分がその被害者になるとは思ってもみませんでした。VWCのプログラムには「ダニ」の項目があり，テレインの中にはダニがいること，ダニに咬まれているのを発見した場合は，エチルアルコールでダニを殺してから取りのぞくように書いてありました。ヨーロッパのＯＬ事情に詳しい小笠原揚太郎氏の話では，「ダニが咬みついて血を吸うと腹の中に血がたまってだんだん大きくなってきますが，これをあわてて手で取りのぞくと，ダニの頭の部分が咬みついたまま残ってしまい，炎症が長引くので，必ずアルコールで殺してから丁寧に取りのぞく必要がある。」とのことでした。さてVWC最終日，パーティーも終わり，宿に帰ってベッドの上にすわって足を見ると，ふくらはぎに黒いものがプツンとあります。よく見ると太腿にも２箇所。「もしや」と思ってコンパスの拡大鏡で見ると，脚がうごめいているではありませんか。アルコールは体の中にはたっぷりあったのですが手元にはなく，仕方なく消毒液をかけてからツメ切りで取りのぞき，ことなきを得ました。皆さんも気をつけてください。

・悲報

残念なことですが死亡事故が起きてしまいました。詳細は知らないのですが，最終日スウェーデンの７９才の女性が，競技中に亡くなられたようです。ご冥福をお祈りいたします。そう言えばVWC会場で買った Orienteering World 誌には，チェコのエリート Jana Cieslarova が競技中にガケから転落し，今季は絶望との記事も載っていましたし，保険の広告がまるまる１ページ出ていました。でも，保険では事故や病気は予防できません。私は大会の救護係を仰せつかることが多いのですが，実はいつもヒヤヒヤしながらおびえています。というのも，もし生命にかかわるような重大な事故や，病気が起こった場合，今のＯＬ大会でできることは，「指をくわえて救急車の到着を待つだけ」だからです。医者が一人いても，診断や治療の道具も，検査機器も，薬も，そしてスタッフもいなければ，その場でできることは祈る以外には殆ど無いのが実状です。くれぐれもお願いします。自分の身の安全をまもるのは自分自身であり，自分の健康の責任は全て自分自身にあるのです。「オレはテレインの中で死ねたら本望だ」なんてわがままは言わないでください。運営スタッフにとってこんな迷惑な話はないのです。



・理学療法．マッサージ

今回は救護所の横に理学療法をしてくれるコーナーがありました。覗いていないのでわからないのですが，なにせ高齢者の多い大会，しかも複数日ですので結構繁盛していたのではないかと思います。こういう設備は日本ではあまり見たことがないのですが，有料でやっても結構はやるのではないでしょうか。また，参加者の皆さんもマッサージを勉強して，自分自身であるいは友人と互いにやってみてはいかがでしょうか。

・ゴールでくれる飲み物

VWCでゴールしたあとに提供されたのは，330ml のミネラルウォーターと果汁 100%のジュースでした。これは「砂糖水だけは飲むまい」と決めている筆者にとっては大変ありがたいことでした。砂糖の害については以前にも書きましたが，いわゆるスポーツドリンクも実は単なる砂糖と塩分の入った水であり，栄養学的にみても決して良いものではありません。それどころか，大量に発汗したあとに急激に飲むと，電解質のアンバランスが起こり，危険ですらあると言われています。やはり人間にとってはナチュラルなものの方が安全なのです。これからは，スポンサーが提供してくれさえすれば何でも出すのではなく，健康のために悪いもの（圧倒的に多い）はスポーツマンならば「Ｎｏ」と言いたいものです。もっとも今回のものが英国の先進性の故なのか，たまたま出されただけだったのかは筆者は知りませんが。

次回は同じくVWCでの食物の話です。

［訂正とお詫び］

３月号の「捻挫」のところで，「外反ねんざ」が多いと書きましたが，「内反ねんざ」の誤りです。（足の裏側が内を向く＝外側がのびて傷害される）　吉田勉氏よりご指摘を受けました。氏にお礼を申し上げると共に，皆様に訂正とお詫びを申し上げます。

根の上高原オリエンテーリング大会

1994年9月24日（土）　ルーパー大会（個人大会）
9月25日（日）　第２回６人リレーＯクラブカップ

富田吉郎選手・絶好調!!
２日間連続優勝（さらに長野県大会・東北大大会でも優勝）

去る9月24日・25日の両日、岐阜県根の上高原において、OLCルーパーとR.M.Oサービスの主催による、根の上高原オリエンテーリング大会が開催された。OLCルーパーにとっては、創立20周年記念大会。R.M.Oサービスでは、昨年トータス大会とタイアップして開かれた６人リレー大会の第２回開催ということになる。

１日目、個人戦であるルーパー大会は、最高位クラスで、男子は富田吉郎選手（多摩OL）、女子は福士淑子選手（東京HRC）が優勝した。

SQUADのＢ級強化選手でもある富田選手は最近絶好調。８月の長野県大会でも、１０月の東北大大会でもエリートクラスでの優勝を飾っている。何かいいことでもあったのだろうか？

２日目、６人リレーＯクラブカップは、やはり富田選手のいる多摩OLが、アンカー富田選手の活躍で前を走る京葉OLCを逆転し、昨年に引き続き優勝。見事に２連覇を飾った。

京葉OLCは惜しくも２位となったが、６位にも入賞チームを出しており、昨年同じく２チームが入賞した多摩OLとともに、クラブの層の厚さを示している。

なお、純正チーム外で参加をしていた”ユニバー94代表”チームは、レースとしては多摩OLをおさえトップでゴールをかけ抜けている。アンカー松沢選手が京葉と多摩、両チームを逆転してのウィニングを果たした。

また、今回から新設されたベテランカップでは、OLP兵庫がＶ。往年の底力を示してくれた。

ゴールしてチームメイトや仲間たちとレースを語る富田選手

表彰式でインタビューを受ける富田選手。ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰは、鈴木夕紀子選手（静岡OLC）。「普通はチームの中に一人ぐらいは女子がいて、その人のためにがんばろうという気になるもんだと思いますが、多摩OLは男性ばかりのチームで、富田さんはどういう風に動機づけをされたんですか？」

大会成績

ルーパー大会

H21AL

1	富田　吉郎	26 多摩ＯＬ	54:26
2	武田　光	23 早大院ＯＣ	58:51
3	井上　直丈	24 ぐるぐる会	1:01:08
4	田代　雅之	28 ＯＣワンダラーズ	1:01:50
5	武藤　拓王	30 京葉ＯＬクラブ	1:02:47
6	松澤　俊行	21 東北大ＯＬＣ	1:02:48

D21A

1	福士　淑子	24 東京ＨＲＣ	49:58
2	金子　しのぶ	25 方向音痴会	58:02
3	加納　尚子	24 Ｔ．Ｚｅｂｒａ	58:12
4	山本　佳代	19 北大お嬢の会	1:01:02
5	長谷川　恵子	31 京葉ＯＬクラブ	1:02:21
6	三井　由美	35 三河ＯＬＣ	1:03:47

第２回６人リレーＯクラブカップ

クラブカップ

1	多摩ＯＬ	3：57：50	藤平正敏	高橋厚	菅原琢	鈴木規弘	ﾖﾙｸ.ﾌｪｯﾃﾙ	富田吉郎
2	京葉ＯＬクラブＢ	4：01：58	早野哲朗	宮本知江子	山田隆浩	田中徹	砂川貴幸	武藤拓王
3	方向音痴会	4：07：08	金子しのぶ	高尾昭次	宇野裕人	上条圭	金田浩	田代雅之
4	静岡ＯＬＣ	4：11：49	岩井優一	北川文子	平井均	坂野晴彦	鈴木夕紀子	村越真
5	ＯＬＰ兵庫	4：30：20	川崎輝雄	内山孝博	笹田啓一郎	松本和美	藤井範久	橋本裕志
6	京葉ＯＬクラブＡ	4：32：28	小山清	草野望	松沢修	小林岳人	斎藤宏顕	遠藤太郎

ベテランクラブカップ

1	ＯＬＰ兵庫	2：24：08	芝昌宏	中島康雄	尾上俊雄
2	三河ＯＬＣ・Ｖ	2：31：51	小幡昭次	平山暢二	加藤照
3	千葉ＯＬＫ	2：46：03	鈴木榮一	山口裕	西原隆

多摩OL　富田吉郎

トップの京葉OLCと５分差、２０秒後から非純正のユニバーチームの松沢が追ってくる、願ってもない展開だ。追われるよりは追うほうが楽しい。しかも今回の多摩OLには”なにがなんでもＶ２を!!”という気負いはない。スタート前に『ゴールレーンでビール持って待ってろよ！』『トップで帰ってこなきゃあげないよ』と交す余裕も見せていた。ところがいざ走り出してみると地に足がついていない。「これがプレッシャーというやつか！」実は結構緊張していたのだ。ラッキーだったのは前半は簡単なレッグが多かったことで、危ういレースをしつつも何とか切り抜け、松沢と高速パックを形成した。早くも５で先行する京葉を捉えると７で２人がミスルートをしたスキにリードすることができた。９でアタックミスをし、松沢には追い付かれたが、京葉は完全に振り切った。トップでのウィニングランとゴールレーンで飲む缶ビールは最高の気分だった。

このようにクラブ員が一体になって盛り上がれる大会は少ない。来年は絶対に３チームは送り込んで、Ｖ３を狙うつもりです。６人リレーを是非続けていって下さい。ありがとうございました。

京葉OLC　武藤拓王

５走、砂川貴幸選手がきっちりトップで帰ってきた。「よしヤルゾ」。大ツボリをしないように慎重に進む。ポスト４を上からアタック。チェックして出戻りで登り始めるとき、下から松沢俊行選手と富田吉郎選手が登ってくるのが見えた。「来たな」。オープンの角で追いつかれる。ポスト５はわずかに先行したが、ポスト６への道走りは松沢選手が引っ張る。「はえェな」。ポスト４までのスロー・ペーストは全然ちがう。これがエリートの走りというやつか。ポスト６をチェックしたあとの「選択」が勝敗を分けた。松沢選手と富田選手が別ルートをとったので、松沢選手につく。多摩OLに２対１で勝負だ。しかしここは、レースの駆け引きよりも地形を見るべきだった。「等高線を切るのか？」「YES」「それは登りか下りか？」「？…」。松沢選手と２人でポスト６直後のピークを向こうの沢へと下ってしまった。本当はピークを巻いて、そのあと登りのレッグだったのに。しかし、あとで富田選手に追い付いた松沢選手はさすがですね。ポスト８手前で１人になる。ポスト９は難なくとったが、これ以降は紛れる余地のないコース。前後に選手の姿が見えない以上あとは会場に着くまで結果はわからない。ラスポのところに砂川選手たちが待っていた。表情より優勝でないことがわかった。走りながら順位を聞く。「２位です」「そうか」。あとは淡々と走ってゴール。準ウィニング・ラン。２位ではやはり悔しい。次はぜひ優勝したいもんだ。

最後に、OLCルーパーのみなさん、素晴しい大会をどうもありがとうございました。

方向音痴会　田代雅之

後ろは大きく離れている。純正チームでは、前に京葉と多摩がいるけど、追い付けるタイム差じゃない。結局スタートからゴールまで自分一人でやることになるんだと思って、何のプレッシャーもなくスタート。

前半、10”～30”程度のタイムロスを繰り返して、ますます先行チームに追い付ける可能性が少なくなっていった。それでも、鳩の会と６で会ってゴールまで一緒だった。ラストスパートで負けたのが、ちょっと残念。

今回のうちのチームは、１走と４走が割と速くて、アンカーの私が走るときにはすでに上位入賞が確約されていた。こういうシチュエーションで走るのも悪くない。

では、ご活躍された１、４走のしのぶさん、圭ちゃんにも一言ずついただきましょう。

こんにちわ。金子しのぶです。私の役割はトップと離れずに帰って来て、みんなのお昼ごはんの”おこのみやき”を作ることでした。３番ポストで多摩の藤平さんが後ろからあらわれたので「何やってるんですか？」とたずねると１番ポストでツボっていたとのこと。おかげ様で多摩の次に２走にタッチすることができました。よかった。よかった。

どうも。上条です。今回私は補欠だったんですが、急遽１軍で走ることになりました。去年アンカーを走り４位で入賞を逃したので雪辱が果たせました。この調子でいくと来年は２位、２年後は１位、３年後は０位だ！

大会運営学 －大会を開き、育てる法－

第4回 『超』調査論

早大OC寿会　池ケ谷悦朗

レベル雑多な集団による地図調査

今回は"『超』調査論"と題して、地図の調査品質を向上させるための総合的な施策について述べることにしたい。

これまでの内容からいって、この連載で地図調査を取り上げることに多少の違和感を感じる方があるかも知れない。しかし、いわゆるボロ地図の提供は、最大級の失敗である。いかにイベントとして盛況だったとしても、競技の根本にある地図がボロボロでは元も子もない。正確な地図、その大会にふさわしいレベルの地図を提供することは、主催者の責務であろう。ここで地図調査を取り上げることは、私にとって、ごく自然なことである。

ところで、違和感を感じるとしたら、それは地図調査から技術的なものを連想するからであろう。確かにそれはもっともである。しかし、調査者の技術の良否がダイレクトに地図の質を左右するのは、調査人数がごく少なく、レベルにバラツキがない場合であって、今日のように大勢で調査を行う場合には、問題は混沌としてくるのである。

表1に昭和59年度と平成4年度の4大学大会の地図の調査者数を示す。このように、調査者のすそ野は広がってきた。これだけの人数の皆が皆、十分なスキルを持っていようはずがない。早稲田について言えば、メンバーが充実していた10年前でさえ、1／4ないし1／3程度のスキル不足者を含んでいたというのに。

表1　4大学大会の地図調査者数

	昭和59年度		平成4年度	
東大	鹿野山	30	吾妻太田	53
筑波	徳次郎	22	赤根林道	32
千葉	五割山武山林	35	いっぱい水	40
早大	小櫃林道	25	赤根が峠	45
平均		28		42.5

もっとも、こんな表など出さなくとも、少数精鋭で行われる調査が、むしろ稀であることは、ご存じであろう。まちまちな技術レベルの調査者が、よってたかって山に入る――それが今日の地図調査のスタンダードなのだ。

はたして、このような状況で良い地図ができるだろうか。やはり、何らかの手を打ち、策を施した方が良いのではないか。私は、大きく分けて次の2つの施策が必要だと考えている。

第一に、地図調査スキルの向上である。レベルまちまちな雑多な集団を"多数精鋭集団"に近づける努力と言っても良いであろう。調査の講習や実習を通じて各人の調査能力のアップを図ることは必要不可欠であり、今後とも努力を続けていかなければならない。

第二に、これとは少々異なったアプローチが考えられる。それは、このような雑多な集団で調査しなければならない現実を受け入れて、このようなメンバーでも、ちゃんとした地図が作れるような仕組みを用意することである。学生クラブでは、少しずつとはいえ、毎年確実にメンバーが入れ替わる。つまり、慢性的に技術水準がバラバラなのだ。このようなクラブにとっては、この第二の施策が、実はスキルアップと同じくらい重要な意味を持つのである。

そこで、私は、この第二の施策を取り上げ、純粋な個人のスキルの問題と切り離して、調査を考えてみたい。これだけ目の当たりにしながら取り上げられることのなかった、レベル雑多な集団で行う地図調査について、グロスで、マクロに考えてみたいのである。

精鋭調査との間に大きな開き

最初に少数精鋭による調査と大勢による調査がどれくらい異なるものか、紹介しておこう。

地図調査にも、御多分にもれず、延べ人数という魔物は潜んでいる。1人でやると10日かかる調査に、10人で取りかかったからといって、1日で終わるとは限らない。1人で調査する場合にはあり得なかった基準や質のバラツキが生じ、それを埋め合わせるための作業が事前にも事後にも必要になる。ある程度のスキルの人間が数人で行うのなら、まだ調整程度で済むが、今日の学生クラブのように30人からで調査するとなると、様相は一変する。2次調査時点での1次調査からのやり直し、といった事態が発生してくるのである。こうしたことは、経験的にもおわかりいただけるだろう。

では、少数精鋭による調査と、レベル雑多な集団による調査とは、どれくらい調査の生産性が異なるのであろうか。調査の生産性は、以下の式で求めることができる。

$$\text{調査の生産性} = \frac{\text{テレインの面積}}{\text{調査に要した時間}}$$

ここまでは良いのだが、実際にこれを求めるのが難しい。分母は記録に乏しいし、分子は求めるのが厄介である。

幸い、私の手元には『小櫃林道』作成[illegible]、いつ誰が調査に入ったかという記録が残っていた。さらに、今回、京葉OLCの田中徹氏から貴重なデータを提供していただくことができた。氏が携わった様々な地図の延べ調査日数のデータである。その中には、京葉OLCによる調査と、山川克則氏らと2～5人の精鋭で臨んだ調査の、両方のケースが含まれていた。

もう一つの問題は、面積の測り方である。面積といっても、ここではそれほど正確な値が必要なわけではない。そこで、テレインに250m四方のメッシュをかぶせて、そのメッシュの数で面積を測ることにした。

$$\text{調査の生産性} = \frac{\text{テレインのメッシュ数}}{\text{延べ調査日数}}$$

としたのである。

こうして求めた各地図の調査生産性を表2に示す。

このように少数精鋭による調査と集団による調査の間には、生産性に極めて大きな開きがあることが明らかになったのである。

チェックとフォローの体制をつくる

さて、原点にかえって、今日の地図調査の現状や問題点について考えてみよう。

クラブなどの集団で調査を行うと、必ずと言って良いほど次の2つの問題に直面する。

第一に、締切日までに調査が終わらない者がいることである。締切を過ぎ、催促してみて、初めて、まるで進んでいなかったことが判明する場合さえある。

第二に、使い物にならない1次調査が必ずと言って良いほどあることである。2次調査のフタを開けてみて、クリーンコピーと現地との相違に愕然とするということも珍しくはない。

また、これら2つの問題は無関係ではない。せっぱつまってくると、作業が雑になるのは世の常であろう。調査の遅れが粗雑な調査の誘因になることは、想像に難くない。

しかし、期限を過ぎてから気がついたのでは手遅れである。手の施しようがない。発見が遅すぎるのである。メンバーのレベルは高くない。だから、遅れることもあろうし、いい加減な調査をすることもあろう。それは、それでも良い。しかし、そこまで分かっていながら、放っておく手がどこにあろうか。悪い結果が出る前に、何らかの手を打たなければならないのではないだろうか。

つまり、早期発見、早期治療である。そうなる前に、そうなる前から、調査の進み具合や精度についての定期的な検査を実施することが必要なのである。

実を言うと、私自身にも調査を投げ出した経験がある。大学2年の時のことだ。『赤根峠』の北部、急峻な通行可能度B～Cの山（『赤根峠』はA～Dの4段階表示）を与えられて呆然とした。手に負えないのである。自分のスキルではどうしようもないので、誰かに代わってもらいたかったが、皆それぞれ自分の範囲を持っているので、そうもいかない。モタモタしているうちに期限が迫ってくる。私は、地図のはずれであるのを良いことに、可能度Aの部分だけ調査して、あとは適当にCに塗って済ませてしまった。

翌年の『小櫃林道』では、2次調査にも入り、クリーンコピーのいい加減さに愕然とした。確かに、振り返ってみれば、その範囲の1次調査者は「わけが分からん。理解の限界を超えている。」などと自嘲気味に語っていた。ただ、その割には、ずい分早く宿に帰ってきていたようだったし、期間内に調査を終わらせていた。その一見順調な進捗が、なげやりな調査によって、もたらされたものだったとは――。しかし、ここで彼を責めても始まらない。この失敗の原因は、彼が明示または暗示していたアラームをキャッチできなかったことにあるのだ。その時点で気づいて、私なら私が半日ほど一緒に山に入って指導するなり、調査範囲の変更を進言するなどしていれば、調査し直しにはならなかったのではないだろうか。

つまり、日頃から失敗の前兆をキャッチし対策を打てるようにすること、そして、そのための体制を整えることが大切なのだ。大勢で調査する場合、チェックとフォローは欠かせないのである。

今日の大会では、しっかりした運営組織が作られる。それに比べ、調査に臨む体制はどうであろう。作図者のもとに、何十人もの調査者が、スキルに関係なく、横一線に並んではいないだろうか。著しく組織化が遅れているのである。

そこで、私は、最初から2次調査の単位でグループ分けをしておくことを提言したい。各グループのリーダーは2次調査者。単なる2次調査者ではなく、その範囲を統括し、精度を保証する責任者である。

各リーダーは、合宿調査なら毎日、通いならば毎週、進み具合や正確さをチェックし、適宜アドバイスを行う。患部が見つかれば、すぐに対処する。こうすることによって、早期発見、早期治療が実現するのである。

個人が趣味で作る地図ではない。クラブ等が大会のために作る地図なのである。このような組織的対応が考えられて然るべきなのではないだろうか。

進み具合をチェックする

"定期検査"は次の2つの観点から行う。

第一に、そもそも調査しているかどうか。

第二に、きちんと調査しているかどうか。

すなわち、第一の観点は進捗であり、第二の観点は精度・品質である。

第一のチェックは至って簡単。クリーンコピーを見てあげれば良いのである。この時、フィールドコピーによる代替を認めてはいけない。クリーンコピーを書き終えていなければ、調査を終わったことにはならないからである。

さて、リーダーは手元に、あるものを用意しておく必要がある。先ほど述べた250m間隔に区切ったメッシュマップである。これを進捗記入用に使用する。担当者が持参した

表2　地図調査の生産性

	ﾒｯｼｭ	日数	生産性	ﾘﾒｲｸ	困難要因	人数	調査者　（敬称略）	備考
ふじ	171	27	6.3	△		5	田中、山川、山岸、村越、西尾	図化原図使用（94/1月号『ｵﾘｴﾝﾃｨｱのための本棚』参照）
千万町	68	12	5.7	○	複雑	4	田中、山川、山岸、村越	
君津糸川	120	25	4.8	△	一部急峻	2	田中、山川	『小櫃林道』の南部を含む。ヤブ山などを除くとき5ﾒｯｼｭ→ 3.8ﾒｯｼｭ/日
山武城府	105	30	3.5	○		2	田中、山川	「ダラダラやっていた。25日あればできる。」(田中氏)　→ 4.2ﾒｯｼｭ/日
山武椎崎	141	71	2.0	○		17	京葉ＯＬＣ	『山武埴谷』のリメイク
勝浦大楠	57	34	1.7		複雑	2	田中、山川	
山武埴谷	117	110	1.1			7	京葉ＯＬＣ	
小櫃林道	129	129	1.0			25	早大ＯＣ	
（1次）		94	1.4					内訳（1次／2次の切り分けは厳密とは言えない）
（2次）		35	3.7					〃

クリーンコピーを見て、調査が完了している部分のメッシュを蛍光ペンで塗りつぶしていけば良いのである。こうすることによって、調査の進行状況を目で見ることができる。メッシュを数えれば、パーセンテージも分かる。達成感もあろう。

また、この手法は、通いの調査などでリーダーと各調査者が直接会えない場合にも有効である。電話で「C８，Ｄ９が完了です。」などと座標で報告すれば良いのである。

問題は、この報告を受けた後の対処である。遅れていないか、やけに速く進んでいないか、チェックを行う。

まず問題になるのは遅れである。調査が進まないのは、さぼっているか、悩んでいるかのどちらかであろう。さぼっているようであれば、叱咤激励する。調査が難航し、悩んでいるようであれば、指導者や応援者をつける。調査は別に１人でやらなくても良いのである。また、調査範囲が担当者の手に負えないようであれば、配置転換を考えることも必要であろう。

他方、順調に進んでいるからといって、手放しには喜べない。先ほど例に挙げたように、やけに速い調査の裏には何が隠れているか分からない。

表２をもう一度見ていただきたい。『小幔林道』の１次調査の生産性の値は１．４メッシュ／１日である。平均すると、ひとり１日に２メッシュも進まないのである。初心者なら、なおさらであろう。もし、２メッシュ以上進んでいた場合は、理由を問う。Ｃヤブ、田畑だったなど、特定の理由があれば理解できる。そうでない場合は、彼のスキル向上を喜ぶ前に、手抜き調査を疑ってみる必要がある。

このように、大ざっぱではあるが、調査経験が豊富でない調査者に対しては、「１日１メッシュ」を基準として考えれば良い。これは、彼らに対して「あと３０分粘って１メッシュ終わらせよう。」といった目標を与えることにもなろう。

また、「１日１メッシュ」という基準は、それくらい時間をかけて調査すること、という指針でもある。これまでの調査講習会では技術を教えるだけで、実際の調査のペースなどについては触れなかったのではないかと思う。１日の基準を何メッシュにするかについて、私はこだわらない。しかし、基準を提示して、「これくらい時間をかけて、くまなく調査しなさい。」と指導することは必要なことであろう。

調査内容をチェックする

第二の観点は、きちんと調査しているかどうか、である。

調査されていない地図というのは、はた目にも分かる。いかにも調査されていない、という感じがするものだ。

ただＢ（走行困難）に塗られ、特徴物もなく、等高線も丸っこい── そんな地図は、いかにも信用ならないという感じがする。可能度で言えば、Ａ、Ｂ、Ｃが適当に分布していた方が、調査されているという印象を受ける。全然ＡやＣがないのは変だと思う。Ｂには、本来の走行困難という意味のほかに、非Ａ、非Ｃという意味合いもあるのだ。面倒臭くなったから、Ｂでごまかしたのかも知れない。

原図をトレースしただけの等高線は、それと分かるようなカーブを描く。きちんと修正されたコンターには、調査者の自信がのぞく。かといって、修正されていれば良いというものではない。１本の等高線が極端に曲がっているのは、疑ってかかるべきだ。いかにも怪しい。複数本を少しずつ曲げて表現するのが適切なのではないか。大げさなコンター修正や点状記号による表記への依存は、初級調査者が陥りやすい落とし穴である。尾根・沢の形が変化に富んでいるか。なんでもない斜面の緩急を表現しようと努めているか。── クリーンコピーを見るだけでも、ある程度、精度の予測はつく。

これらのチェックには、フィールドコピーを併用する。プロセスを見るのにフィールドコピーは欠かせない。これを見ることによって、クリーンコピーによる判断結果を補完することができるのである。

こうして見ると、私たちは変化の有無や量的なものを何気なく見ており、その結果、ある印象を抱くようだ。そこで、割り切って数値化したらどうなるか、試してみたので紹介しよう。

今度もメッシュマップを用いる。『ふじ』の中に１メッシュあたり何個の岩（「・」で表記されたもの）があるか数えてみたのである。結果は、以下の通り。

南部	81個	／ 49ﾒｯｼｭ	＝ 1.65
北東部	105個	／ 72ﾒｯｼｭ	＝ 1.46
北西部	48個	／ 50ﾒｯｼｭ	＝ 0.96
全体	234個	／ 171ﾒｯｼｭ	＝ 1.37

つまり、『ふじ』近隣のテレインでは、これと同じくらいの割合で岩があるのではないかと推測できる。今後、付近の調査をする場合、クリーンコピーを見て、このくらいの値になっているかどうかチェックしてみれば良い。この値より、あまりに少なければ調査が甘い可能性があるし、逆に、あまりに多ければ、取捨選択の基準に問題があると見なすことができる。

もちろん、異種のテレインで比較する[illegible]も全く意味がない。

実は『富士須山口』（第14回ワンダラーズ春のＯＬ大会、1990）に岩が少ないのが気になったので、それを基礎としてリメイクした『須山』（インカレトレマップ、西尾氏・山川氏調査＝いずれも『ふじ』調査者）とあわせて調べてみた。結果は、以下の通り。

『富士須山口』	27個／66ﾒｯｼｭ	＝0.41
『須山』	37個／66ﾒｯｼｭ	＝0.56

同じ富士山麓とは言え、須山まで来ると、『ふじ』とは随分状況が異なるようだ。この差異を云々するのは、この連載の範疇ではない。地図調査という面から見ると、『富士須山口』と『須山』の差異だけが課題になろう。

それはさておき、ここで挙げたようなチェックのポイントは「チェックリスト」としてまとめておくと良い。チェックの均質化を図るために有効である。しかし、この辺まで[illegible]ると、オリエンティアとしての素養の問題である。ウソ臭い等高線を見て「ウソ臭い」と感じない者に、読ませるマニュアルはない。チェックリストを見ながらでないと、チェックできないようでは困る。このレベルのスキルが身についていないようではリーダー役など勤まらないであろう。

では、なぜチェックリストを作るかというと、むしろ全調査者に配布するためである。リーダーの頭の中にあるチェック基準をあらかじめ見せておくのである。こうすることで、各調査者は自分の調査を自分でもチェックできるようになるし、気をつけて調査するようにもなろう。多少なりとも品質向上とスキルアップにつながるのではないだろうか。

これまで述べてきた、クリーンコピーやフィールドコピーを用いた一連のチェックの結果、問題ありと判断した場合には、現地に乗り込む。そこで、クリーンコピーが正しいことが分かれば、素直に喜べば良い。そうでなければ、先述したような対策を実施する。

大勢で調査する場合には、放りっぱなしにするのでなく、状況を見ながら、柔軟かつダイナミックに手を打つ組織的対応が必要になるのである。

大会という観点からチェックする

さて、ほとんどの場合、O－MAPは大会競技用地図として作られる。O－MAPにとって大会当日のレースをクリアすることが最優先課題なのだ。したがって、大会の主催者は、調査がある程度まで進んだら、大会を成功させるという観点から、次の2つのことを真剣に検討するべきだと思う。

第一に、大会で使う部分は特に念入りに調査すること。

第二に、大会では精度の低い部分を使わないこと。

つまり、ボロを出さないためには、取り繕うことも、臭いものにフタをすることも必要なのである。ボロを出さないためには、ボロを作らないことが一番重要である。しかし、ボロを見せないように努めることも、大切な要素なのである。

第一の観点から順に述べよう。

調査が進むにつれ、スタート地点の候補でるとか、ポストをたくさん設置するエリア、主要なレッグなどが浮かび上がってくる。また、メインではなくても、つなぎの区間として、多くの競技者が走る部分もあろう。そういう所で不具合があると、万人の目に触れてしまう。まず、これを避けなければならない。それから、上位クラスが使用する地域。見る目が厳しいわけだから、調査も重点的にしなければならない。重要なところはより念入りに、そうでないところはそれなりに――。これを傾斜調査方式と呼ぼう。

しかし、実は、これは簡単ではない。どこが重要であるか、個々の調査者では判断できないのである。

そこで重要になるのが責任者の役割である。実際には作図者か競技責任者のいずれかであろう。これまでの作図者は、どちらかと言えば、出てきたものを取りまとめるという受け身の立場であったように思う。しかし、これからは、こうではいけない。テレイン全体を大所高所から見て、どこが重要か、どこなら手を抜いても許されるかを判断して、積極的に采配を振るうことが求められるのである。

さて、第二の観点の話に進もう。

これはボロを出さない最後の手段である。ボロい部分を使わない。コースプランニングの段階で精度の低い部分を避けるのである。

当然のことながら、このためには地図の各エリアの精度情報が集まっていなければならない。今日、精度の低い部分が平気で使われるのは、もしかすると、精度が把握できていないからなのかも知れない。そして、試走でビックリ。でも、時間切れ。やむなく本番、ということなのだろう。

結局、先に述べた日頃のチェックが、いかに大切であるか、という所に落ちつくのであろうか。

責任を明示する

話は少し変わる。

皆さんもご覧になったことがあるだろうが、少人数による調査の地図の中には、調査エリアの分担が地図入りで明記されているものがある。それを多人数の地図にも適用したらどうか、という提案である。

今日の多人数調査地図では、誰がどこを調査したのか分からない。その匿名性への甘えが結果的に粗悪な調査をもたらしているのではないだろうか。とは言え、全員の範囲を示すことはできない。また、その必要もない。そこで、活きてくるのが先に述べたグループである。グループ単位の分担地図を地図面に載せれば良いのである。リーダーは2次調査者、責任者として明示される。

もう見て見ぬ振りはできない。いささか世知辛くはなるが、この体制整備と責任明示化の抱き合わせ実施は、すぐにも効果が期待できるのではないだろうか。

批判を求める

責任の明確化は、調査者にとって確かにプレッシャーにはなるが、さらにもう1つ手を打つべきだと考えている。それは、大会会場に地図に関するクレームの受付窓口を設けることである。

大会会場には以前から苦情受付窓口が用意されている。しかし、地図の精度についてクームをつけることは、まずない。文句を言っても始まらないというあきらめが先にたつ。地図についてはクレームをつけないという暗黙の了解があるかのようにも見える。この悪循環を断つためには、まず運営者が立ち上がらなければなるまい。自ら進んで地図への批判を求めて出る姿勢が必要になる。

たとえば、窓口に白地図のコピーを用意しておき、クレームを言いに来た人には1枚ずつ渡して、不具合の箇所と実際のイメージを記入してもらう。あるいは、巨大なサイズに拡大コピーしたものを掲示しておき、自由に記入してもらっても良い。ただ、後者を採用する場合には、同感の人の数を把握できるよう工夫した方が良いであろう。

もちろん、このヒアリングの結果によって特定の調査者を非難してはいけない。とは言え、批判を受けた範囲のリーダーは猛省するべきであろう。また、1次調査の担当者は参加者が書いてくれたイメージを見て研究し、次回に向けて、弱点の克服に努めれば良い。また、こうして集められた情報は、再調査時の参考資料としても使えるはずである。勇気を出して悪循環を断ち切れば、たちまち可能性が広がるのである。

自由放任主義の終焉

元来、地図調査は職人の仕事だった。名人たちは山に散り、幾日かで広大な範囲を仕上げる。

しかし、今日の地図調査の実態は、大きく異なる。仕事師たちに頼んだ時と同じように、任せっきりにしておいたのでは、いつまでたっても終わらないし、ろくなものができないのである。個人技に依存する自由放任の考え方と訣別しよう。良い地図は、チームのフォローとコントロールのもとに置かれてこそ、作成することができるのである。

パーマネントコース

りぽーと

□１９９４年４月９日（土）
群馬県　　～木佐木 94-4 ～
「銅街道・花輪Ａ」

［距離］　　１０ｋｍ
［ポスト数］　１２本　PC·O-MAP

わたらせ渓谷鉄道「花輪」駅下車。

駅直前の「今井屋」にマップあり。マスターマップの掲示板は駅舎の横にＡ・Ｂ・Ｃの３コースに分けて３枚立っている。コース図は赤印と黒印と２枚ずつ入っているので，黒印の方は当分大丈夫だろう。１：15000 のマップで，平成５年調査のため精度は 100%に近い。コースは山60%・山の麓20%・人家や畑20%で，標高差は 200m ぐらい。コースの整備状態は優に近い。ポストの高さは標準だが，頭は小型。赤と記号は鮮明。１２本とも直立不動。本年２月５日，残雪のＣコースを歩いたので，今日はＡ・Ｂの２コースを踏破した。Ａ・Ｂの２コースを同時に歩くためには，Ａコースをベースにして Ｂのポストを組み込んでいけばよいと思う。Ａ・Ｂともポストは１２本だが，そのうち５本が共通である。

（リポートはＡコースについて書く）

②から 80mほどで小径の分岐に出る。左への小径は杉林の中へ入るが，ほとんど形がないので注意。杉林を抜けると荒れ地に出るが，かまわず直進すると道に出る。五覧田城跡（山頂）の⑤から350m の間は伐採地で一部には桜の苗木が植えてあった。⑧の手前（Ａコースの最北端）をマップで見ると，道と小径の間が 50mほど途切れて，その間に沢がある。現地に行くまではその空間がすごく不安であった。⑦から約 700m で丁字路に出て，右折するとすぐＵ字形に曲がり，右側の沢が 5m の崖下にあるが降りられない。あきらめずに進んで行くと，先ほどの丁字路から 100m 足らずで崖の高さ 1.5m ほどになる。そこで降りて沢を渡れば対岸に小径の終りがある。もし小径が無ければ右へ進めば小径に出るはず。この地点で道と沢の間はマップでは 30m 以上に見えるが，実際は 5m ほどしかない。⑩の前後も径は無い。⑩で必ずやらねばならぬことは，⑪へ通じる径の終点（両側が土崖で，倒木で通り難い）にコンパスを正確に合わせておくことである。⑩から草原を 80m南下すると径に出る。そこから約 60mの間は背丈ほどの竹藪である。細い竹が密生しているが，コンパスに注意して前進する。⑫は崖の上にあるので，北の方からアタックする方がよい。

当日は10時～11時の間（谷の奥では２時頃も）雪が舞い，日陰は冬のような寒さでブルブル。桜を楽しみにしていたが，まだ１分～３分程度の開花でガッカリ。しかし，上記のようにコンパスを必要として，ＯＬの醍醐味を楽しめる所が数か所あり，お薦めコースの一つに入れたい。総合して９２点。

（東村役場観光課　　☎0277-97-2111）
（今井屋　　☎0277-97-2426）

□１９９４年７月１３日（水）
新潟県　No. 4　～木佐木 94-5 ～
「胎内平」

［距離］　　１０ｋｍ
［ポスト数］　１０本　PC·O-MAP

JR羽越本線「中条」駅下車。駅前の道を左へ 30m行くとバス停がある。「胎内温泉」行きのバス（午前中は 10:00と 12:46 だけ）に乗り「下越スポーツハウル前」で下車。バスは所要50分で 450 円。私は「中条」駅からタクシーで行き，帰りはバス（午後は 1:43，5:39，6:49）を利用した。バス停から 100m の所に「下越スポーツハウス」がある。マップとマスターマップはそこにあるが，掲示板は見当たらない。マスターのコピーしたものをくれるので，写す手間が省けてありがたい。スポーツハウスの休館日はない。しかし，11月頃から５月頃までポストを撤収するので，その頃は電話で確認してから行くこと。マップは１：15000 で，平成元年調査のため精度は優。コースは山と丘60%，舗装道路40%で，大部分が森林公園に含まれている。したがって遊歩道が多く，⑤→⑥以外のコースは良く整備されている。標高差は 100m 弱。

ポストは③⑤⑧が石油缶。その他は標準のもので，錆びた⑥以外は文句なし。石油缶は設置・変更が容易である反面，いたずらで持ち去られるリスクがある。現に⑧がそうであった。マスターによると⑧は分岐のはず。このあたりは疎林で雑草の丈も低い。分岐から三方へ各50m ほど探したが見当たらず。後日，「スポーツハウス」へ電話で確認したところ，⑧の石油缶は分岐の定位置から80m の所へ，いたずらで捨てられていたそうである。

このコースは毎年ポスト位置と記号が変更されるらしいので要注意。

舗装道路から③への入口は腰までの雑草のため不明瞭なので歩測をしっかりすること。⑤→⑥はこのコースでの最難関。背丈以上の雑草と蜘蛛の巣のため進行は思うにまかせず，しかも足もとの小径は途切れがち。ここでは歩測は不可能に近い。⑩は小道の分岐から北へアタックするのが良策のようだ。低い雑草や幼木を押し分けて 40mほど下ると⑩がある。③⑥⑩の位置は，ＰＣとしては大変興味のある趣向になっている。

このコースの問題点は３つある。１つめは，⑩からゴールまでが 3kmもあること。バス停はゴール（スタート）の近くにしかない。しかし，途中に「フラワーパーク」や売店があるので，少しは気分的に救われる。２つめは，No.のとおりに進むと③が片道 300m 弱の出戻りになること。３つめは，石油缶を標準のものと交換して欲しいこと。「下越スポーツハウス」のＰＣ担当の方へ。「管理者のご苦労もよく知らず，勝手なことを書いてすみません」

ゴール寸前の「胎内橋」から見た「胎内川」の川の中の「大噴水」は圧巻であった。疲れの80%が吹き飛んだ清涼感があった。

（下越スポーツハウス☎0254-48-3208）

ﾘﾎﾟｰﾀｰ：　〒185 国分寺市泉町3-5-6-104
木佐木輝雄

ORIENTEERING MAP OF

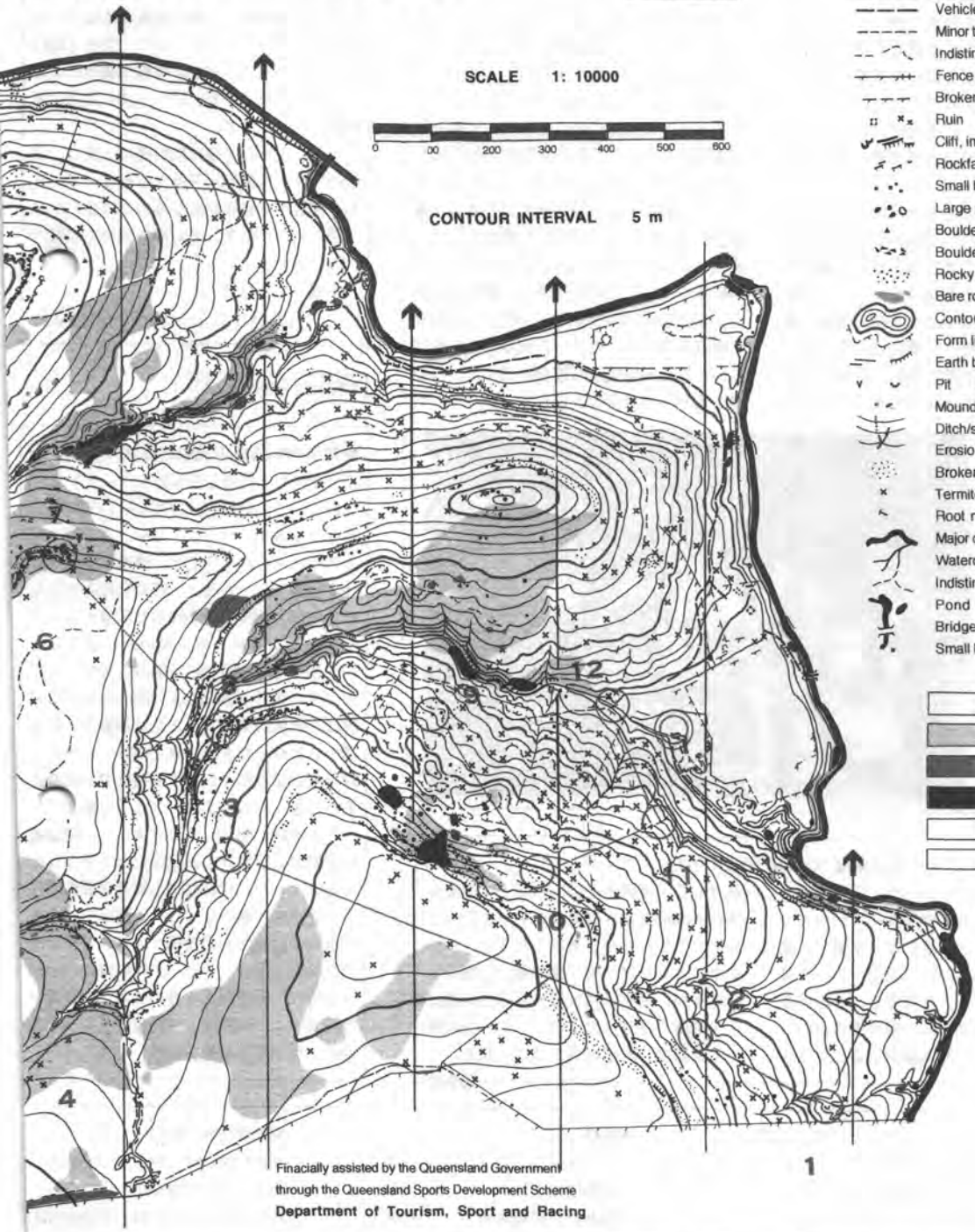
COTSWOLD NORTH

QUEENSLAND ORIENTEERING ASSOCIATION

SCALE 1: 10000

0 100 200 300 400 500 600

CONTOUR INTERVAL 5 m



LEGEND

- Sealed road
- Unsealed road
- Vehicle track
- Minor track
- Indistinct track
- Fence Gate
- Broken Fence
- Ruin Wreckage
- Cliff, impassable
- Rockface, passable
- Small boulder > 1.0 m
- Large boulber
- Boulder cluster
- Boulderfield
- Rocky ground
- Bare rock
- Contours
- Form lines
- Earth bank
- Pit Depression
- Mound/small knoll
- Ditch/small erosion gully
- Erosion gully
- Broken ground
- Termite mound
- Root mound
- Major creek
- Watercourse
- Indistinct watercourse
- Pond
- Bridge
- Small building

- Forest run
- Slow run
- Walk
- Fight
- Rough open
- Semi open

Finacially assisted by the Queensland Government
through the Queensland Sports Development Scheme
Department of Tourism, Sport and Racing

香港ジュニア合宿報告

村越　真

8月の2日から5日にかけて，香港のジュニア選手8名とコーチ4名および韓国の選手1名を迎え合同のジュニア合宿が開催された。御存じのように香港のテラインのほとんどは緑におおわれた険しい山で，技術的に充分な練習をする機会もない。APOCその他の機会にしばしば日本を訪れたパトリックは，91年ごろより日本でのジュニアのトレーニングを希望しており，その条件が整いようやく今年実現の運びとなったのである。

国内で選考を受けてきただけあって，技術的には未熟だがその熱意は印象的だった。富士地区のどこまでも広がる針葉樹の林は，きっとわれわれがスウェーデンに初めて行った時に感じるような強い印象を彼らに与えたことと思う。最初は不安に感じたこうした森にも次第に慣れ，後半はまずまずのタイムで走れるようになっていたようである。

この合宿には日本のジュニア選手7名も参加していたが，お互い英語のコミュニケーションがいま一つだった点は残念であった。それでも4日の夜にはバーベキューやスイカ割り（これは非常に受けていた），記念品の交換などで盛り上がっていた。

運営にあたった国沢五月さんをはじめとするトータスOLCのメンバー，食事などの準備にあたってくれた佐野美千代さんと原志保子さん（ともに静大），コーチとして参加した樋口一志さん，利光良平さん，資金的な援助をしていただいた静大OLC，東大OLK，大阪OLC，青木弘さん，山本のり子さん，三好良子さん，静岡OL協会，また長野県大会参加にあたって多大なご便宜を図ってくださった元木悟さんをはじめとする長野県OL協会の方々に，この場を借りてお礼申し上げます。

日本チーム好成績で帰国（マスターズ・ゲーム）

去る9月下旬にオーストラリアのクインズランド州で行われたマスターズゲーム・オリエンテーリングの部には，主催／日通旅行・後援／O－JAPAN で参加ツアーを募集しましたが，20人が参加し，その内2／3ほどの方々がメダルを獲得するという好成績をおみやげに無事帰国しました（京葉OLC・遠藤さん談）。本誌では今後も，特に中高齢者向きの海外ツアーを企画いたしますので，ぜひご参加ください。なお，すでにカレンダーの「海外篇」に掲載していますが，来年7月8日～23日の間に約8日間ほど走れるカナダ・ツアーを計画中です。参加ご希望の向きはご一報を。

―編集部―

PC情報

■広島県No.2・安芸府中（水分峡）コース一時閉鎖のお知らせ

水分峡PCのコース内にあいて，「環境保全林整備事業」に伴う林道造成など，大規模な工事が行なわれており，現在【通行禁止】となっています。発破作業等により立入りは危険なため，同コースを当分の間閉鎖といたします。

なお，工事完了後は地形等が一変し，現在のマップは使用不可能となって，コースも一部変更の必要が生じるのではないかと予想されますので，その際は改めてご案内いたします。

平成6年10月

広島県オリエンテーリング協会

編集部より

◆循環器系疾患の兆候的症状（精密検査中）が表れて医者から安静な生活をと指示されていて，勤務先は休めないので，私生活は全くのマイペース。でも、この号は何とか仕上げられそうです。◆来年2月？の「全日本リレー大会」，特に会報を持たない県の選手選考会のお知らせ記事をと，2～3のところからお寄せいただきましたが，勝手ながら個々には割愛させていただきます。読者のみなさまで関心をお持ちの方は各都道府県協会（または委員会）にお問い合わせください。◆このリレー大会，昨年度のようにカレンダー裏にでも刷り込もうと思ったのですが，JOA主催についてて本誌が関与してPRすると，主催者↔主管者のトラブルの原因になりそうなので止めました。代わりに主管者代表の方にPR記事をお願いしました。次号に。◆その次号の村越さんの投稿「オリエンティアのための本棚」。ノーベル賞に輝く“われらの時代”戦後民主主義の代表・大江健三郎氏『キルプの軍団』が再登場（4～5年前に小沢保昭氏の書評あり）します。

―流人―

O－JAPAN　発行人／田口　昭子
〒233 横浜市港南区日野南7-9-5
TEL.045-891-7004　FAX.045-891-2500
分室=Annex　TEL.0287-77-1977
郵便振替口座／（番号）00270-9-46870　（加入者名）O－JAPAN 編集部

：購読料
：'94.4月～'95.3月　¥3,600
：（高校生以下）　¥2,400
：1部あたり頒布価格　¥300

：編集責任者／田口　肇
：Chief Editor: Hajime Taguchi
：Editorial Address:
：7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
：Yokohama, 233 Japan